

カタチの生まれるところ

木村 早貴*・吉田 裕午**

The Place where “KATACHI”s are born

Saki KIMURA and Yugo YOSIDA

This paper is concerned with “KATACHI” that is a visualized “Idea”. “KATACHI”s are made and focussed by a beautiful harmony like “MANDARA” Network Renormalization. Typical Metaphors and Symbols of “KATACHI” are shown.

キーワード：メタファ、メッセージ、ユビキタス、やりとり協調、振り舞い行動、オノマトペ、シンボル、モルフ、シンメトリ、メディアリテラシ、コーチング、コミットメント、アフオーダンス、ブログ、インセンティブ

はじめに

握りこぶしの中にあるように見せた夢を
遠ざかる誰のためにふりかざせばいい？

(中島みゆき：歌姫より)

一滴の涙から、コトバがそだった

(長田弘：黙されたことば¹⁾より)

私の人生の花が散ってしまう頃

やっと花は私の心に咲いた

(さだまさし：人生の贈り物より)

近年、情報はどんどんメディア化している。情報は巷に満ちあふれているようにみえて、実は見逃していることの方が多いのではないか？という研究動機から、本論文は生まれた。調べていくうちに、教育の動機においても繋がりが深く、モンテッソーリが幼年期に最重要視していたこととの関連もわかった。いくつかの創世記に共通するように、この世に存在するものすべてに、カタチそして由来が

ある。花や木など目に見えるカタチ、イノチや時間など目に見えないカタチ、詩や歌詞のメタファ(隠喩)など実にさまざまである。しかし、それらは共に調和共鳴しあい、繋がりが合っている。

モノがあふれている現代、どれだけ1つひとつの存在に気づき、その意味や価値に目を向け、生きるために活かしているだろうか？同時に、カタチが姿を伝え変化させる、遺伝や進化とはどのような仕組みなのだろうか？また、カタチが機能を獲得する場面はどこなのか考察した。

アイデア

多くのメッセージを先人の遺産として受け取りながら、揺るぎない信念・哲学を持って生きるのはなかなか難しい。歌の中では緩やかに時は流れていくが、21世紀に入り、天変地異も伴いながら、急速に環境が変化している。情報の世界では、ユビキタス(いつでもどこでも)とよばれている²⁾が、インターネットやマルチメディアのみならず、高機能化する携帯電話、人工衛星から位置情報を得るGPS、高速道路のETC、地上デジタル放送など、どんどん

* 本学初等教育学科21期生

** 本学教授

便利なモノが身のまわりにやってくる。

経済に及ぼす影響については後でふれるが、驚きを智慧に繋げ、実践に結びつける路がある³⁾。温故知新であるが、アリストテレス、プラトンや古典に再発見すること多い。

白川静⁴⁾によると、「真」の由来は、転倒した首、すなわち行き倒れが化けた霊のことだそうである。挽歌や慰霊、生け贄が想起される。

また、「文」も邪を払う×印から生まれ、「産」や「彦」も同じ「聖」の由来を持っているそうである。すなわち、「真」や「文」を求めての内的世界の構築は、常に畏敬の念を持って営まれてきたのである。現代の教育、とりわけ専門学校や多くの塾の教育は、知識、あるいは理解・判断に偏り過ぎていたのではないか？という反省がある。

モンテッソーリが、「書くから深く読む」の順の意義を強調したように、芸術・技術教育においても、見えない循環・先を見越した教育システム設計が必要である。

いくつかの例で確認してみる。

言語教育

- (1)言葉の使用技術（つくる）
- (2)表現を向ける対人関係（つかう）
- (3)内的世界の再構築（わかる）

メディア教育

- (1)作り手（つくる）
- (2)使い手・受け手（つかう）
- (3)指南・手引き（わかる）

総合教育

- (1)技（体育；神経系）
- (2)体（徳育；身体化）
- (3)心（前頭葉）

横断的にみた教育法

- (1)意（行動主義；計量統計、指令情報＞information）
- (2)情（社会的構造主義；充足情報・美性＞affordance）
- (3)知（主知主義；刺激、知識情報・data＞intelligence）

民俗学

- (1)取材（風習、伝承、民芸、古書）
- (2)時代地理背景考察（リンク、体験、直感）
- (3)俯瞰（継承、郷土愛）

言葉や作品などの人工物に運ばれているのはメッセージである。また、「つかう」とは、インタラクティブ（相互作用的）な共同作業であることに注意しよう。「一方的に与える」といった態度は、継承構造として相応しくない。学べ側を、単なる消費者と見なしてはいけない。管理・監視・支配とは異なった次元で、殉職者や裏方、ボランティアに敬意を表する習慣を維持しながら、「友だちの使い方」「兵隊の作り方」「愛という名の支配」といった用法に違和感を覚える育て方をしたいものである。

「ほめる」「叱る」「法則化」などの即効性の宣伝に誘惑されることなく、長期的な見通しの中で行動していきたい。

教師の意図と子どもの関心には常にズレがあるとしても、コミュニケーションのやりとり協調が、振り舞い行動に結びついていく。「役に立つ」という意味は、五味太郎の「だんだん」という歌の別れ場面に涙したというような幼い日の記憶の宝物、いわば種が、ずっと後で開花することをいう。

まさに「よみ」は、予兆の予知、気づきに通じている。危険やカタストロフを「よむ」のは、

占いではない。季節の変化、景気の動向などの認知は、天気図や統計グラフなどの動的なカタチの「よみ」から生まれる。まさに、「よみ」は循環の意識である。そして、これは発想法のカタチでもある。

「よみ」の循環

(1)速読（メモ・付箋）

(2)通読（読解）

(3)味読（解釈）

発想法

(1)現状分析（過去）

(2)原因追求（現在）

(3)解決策（未来）

記憶

(1)どのような姿であったか？

(2)何を大切にしているか？

(3)これからどうなるか？

2度3度と読む価値のある、発達の最近接領域を提唱したヴィゴツキーのいうような、ヒント・アイデアに満ちた歯ごたえのある内容はどこにあるのだろうか？絵本やファンタジーには、先人の知恵や遺言が埋め込まれている。映画 A.I. に出てくるように、事実 fact とお伽噺 fairytale を束ねると「夢」が生まれる。さらに、奉仕ロボットとして作られたジョーが、主人公デイビットを献身的に助け、解体されていく時に、「I am（生きる!）」そして、「I was（生きた!）」と表現したのは、生き甲斐についての1つのヒントになっている。

夢の生まれる所、そして、理想・永遠のカタチ「アイデア」を求めて、その痕跡を遡りながら訪ねてみよう。

コトバ

アイデアのカタチの1つがコトバであり、象形文字の中の仮想現実にあえて、太古には霊の字を加えて、その使用には細心の注意を払ってきた。自然科学、法律学、形而上学、唯心論、唯脳論、唯幻論、唯名論、現象学等々、実在を離れた議論は、幻想に拘泥する危険性が大きい。欲望に駆られた行為の倫理観欠如は、まさに「魔」「修羅」「餓鬼」に翻弄されたといった比喩が相応しい。

オノマトペという働表現がある。声の生まれるところ、呻き・閃きの記述でもある。発想には、ごたごた書かれた文章よりも、ヒントを含む生成的で包括的な、あるいは1度壊してもまた創りたくなるような、暗号クイズのサインが向いている。感覚すべてを通しての認知が最も望ましいが、まず、コトバのカタチから整理・分類してみよう。

型：外見的なパターン、模範

ち：内的な力、風、霊

形：外的>形態学

形象：内的>カタチの科学

形態：複雑な形、擬態、相似

形状：状態を含む

構造：安定な形

図形：簡潔にした形、輪郭、影（マスク）

体系：システム、全体の形

画像：イメージデータ

映像：動きのある画像および音声

メディア：間、環境、インタフェース

メタファ：隠喩、たとえ、繰り込み

知を伝達する当初の目論みとは違って、使い古された言葉には、生気がなくなっているよう

だ。一方、カタカナで記述されると、未知の機能やエネルギーまで込められる雰囲気復活する。ここでは、主としてメタファという言葉にその願いをかけているが、コトバ、カタチとカタカナで表記した理由も、シンボル（象徴）としての意義を強調したいためである。なお、階層および個々のモノ（オブジェクト）への射影は、情報用語で、クラスおよびインスタンスとよばれる。それによってそれぞれの配置場所で機能（コト）を発揮する。これを表す大切にしたい文字のカタチがある。

印：具体的イメージを繰り込み、コトに

識：閃き＝アラヤ（蔵）＝やりあて＝運

観：tact＝パースペクティブ・気転、自在・可触

外来語にも、いくつか大切にしたいコトバがある。1つは、逆に書いて英語の形（form）のもとになったといわれるモルフ（morph）である。モーフィングという言葉にあるように、これはカタチの動的变化を含んでいる。時間軸に流転の様を繰り込んでいる様子は、無常に通じ、狭義の情報（information）にも「内にカタチをつくること」から、漢字の“情”にあたる意味も含まれていたことになる。これが、まさに本来の「情報」なのだ。

また、日本では、対称性と訳されるシンメトリ（symmetry＝sym＋metry）というコトバがある。これは、「共通の尺度」というものの意味で、「みんな違って、みんな同じ」という未来の諸問題の、脱中心規範に基づく解決策を示唆している。

これからの生きる力としての情報能力に、メディアリテラシがある。静的な形は、だまし絵との区別が難しい。因果律や要素還元主義は、

科学の適用範囲を越えて使用していないか、常にチェックが必要である。

ギリシャ神話は、カオス（ソース；湧き口）からエロス（シンク；吸い口）への年代記（クロニクル）を伝えている。美や愛の由来は、後で述べるが、「人」や「久」が、体を支えられたイメージを持っていることも念頭において置こう。また、空と海に父と母を思うように、母なるガイア（地球）と父なるウラノス（守護）、クロノス（時）、ゼウス（科学）の系譜を参考にしていきたい。

絡み合った糸の焦線（瞬間では焦点）がカタチを生じているとみなすこともできる。直観から出発した美のイメージも、表裏や陰陽、あるいは、相生・相克、円相・曼荼羅のイメージを得て、時間軸にも想像の翼を広げる。その切り口には、次のようなコトバが与えられている。

原初的な美のイメージ

・結晶、樹形、地形、植物、動物、生物
かたち化

・かけ言葉、しゃれ、ユーモア（表裏意識）

・シンメトリ化

・正多角形、球、正多面体

・円、環、輪、周、回

糸

・繋ぐ、網、布、絆（紐）、タピストリ、横断、
結、縁、系、普遍、糺（ただす）、玄、幾、戀
循環

・波＝繰り返す、縞、連

・らせん＝繰り返ししながら発展

・渦＝巻き（牧）、己

裂け目、交わり

・ひび、キャズム、奈落、ズレ

JTUY＝丁、打、分、別、峠、人、岐、対、

十、合、衝（冲撞）、ルーツ

捻れ

- ・炎、鬼、紋、情熱、揺らぐ、燃える、束、干渉、マダラ、幽
- スケール変換
- ・超、極、スーパー、ハイパー、ウルトラ、メタ、pan-、trans-、-duce

バランス

善悪無二という言葉がある。また、悪人正機、女人正機という言葉は、どこに由来があるのだろうか？真実は1つとよくいうが、科学の完全性や絶対性が否定的に証明されているように、納得の範囲を越えて、特定の考えが真であると押しつけるのは間違っている。戦争を起こす国々は、それぞれの真実をアピールする。

常に悪を欲し、却って善をなす、あの力の一部です。

(ゲーテ：ファウストのメフィストフェレスの言葉より)

男は女より子どもより嘘がうまいね

女は昨日より明日より嘘が好きだね

(中島みゆき：歌姫より)

藪の中という比喻のように、関係性が複雑に見える状況下では、何が善で何が悪なのか、判別が難しくなる。スペクトルという観察テストがある。秩序・調和をトップダウン的に制御するのか、ボトムアップ的に構成するのかによって、分けて整理してみよう。教育の歴史においても、社会的要請に基づく（ティーチング）のか、自己実現に基づく（ヒーリング）のかで、揺れている。情報の流れとカタチ化を意識して、コーチングというアプローチが注目されている。

同様なことが体の中で起こっていることが、最近注目されている⁵⁾。免疫系においても、

健康を保つ驚くべき恒常性（ホメオスタシス）

が備わっていた。たとえば、風邪をひくと、高熱がでて治りかけに痰がでるのが普通の経過である。体はちゃんと対応しているのに、薬で効果が中途半端なままに押さえるのは、タイミングが逆で、バランスを崩し健全化の邪魔をしている。同様のことが胃潰瘍、癌、アレルギーなど様々に起こっており、医源病・過剰診療に類する行為も至るところで発生している。

学すべきことは、短期的な対処と長期的な適応とでは、全く別の機構が働くという点である。突然おきる衝撃波とゆっくり行われる拡散過程とでは、扱い方が異なる。

別の表現をすると、日常性（継続）に基づく民からの発想・ニーズを意識することである。育て見守る行為も、目先の経済性を超越した、先を見越した献身的な母性に負うところが多い。

拮抗作用（短期攻撃型 vs 長期防衛型）

神経	交感	副交感
ホルモン	アドレナリン	アセチルコリン
白血球	顆粒球	リンパ球
芸術	官製	民芸・農芸
記憶	短期記憶	長期記憶・思い出
市民社会	契約	信任許諾
価値	貨幣（お金） 商品	敬意・刷り込み 使用・ミーム
優先	安心 会社利益	信頼 社会倫理
進行	合理性	納得
財産	モノ	ヒト
粒子、個	電子（フェルミオン）	光（ボゾン）
ジレンマ	経営、資格	生涯学習、教育 自己実現、研究

どうしたら空が買えるというのだろうか？

そして大地を。

風の匂いや水のきらめきを

あなたは どうやって買おうというのだろうか？

(あるインディアン酋長の言葉：父は空 母は大地(寮美千子訳⁶⁾)より)

人間らしさとは、何だろうか？カント倫理「ほかの人間を、自分のための手段として扱わない」は、1つの指針になるが、いつも実行されているだろうか？みんなが協力すれば、みんなの平均的な利益が上がるのに、自分だけ裏切るともっと自分が利益を得る社会的ジレンマをどう克服すればいいのだろうか？

また、ウロボロスの蛇とよばれる株の持ち合いのような自己循環の非生産性・時間の無駄をどう脱すればいいのだろうか？

解決策・極意は、千の風や光が教えてくれている。それに先行・並行して、ストレス因の組織傷害を癒し、アレルギー過剰反応や、無菌培養の脆弱性を乗り越え、耐性を鍛えなければならない。

コミットメント(参画)関係ともいわれるが、「ヒトはヒトを所有しない」「信頼はリスクテキングである」「貶めるウソをつかない」などから出発してはどうだろうか？

ストレスに強く、むしろ逆境をエネルギーにして、「托す」感覚を忘れず、障害になっている河を、「大丈夫、渡ってごらん」と媒介・媒体になれる存在になりたいものである。

文化財に残っている庶民・制作協力者の落書きや、梁塵秘抄(昔の歌謡曲)などにその時々、そこにいた人々の息吹を復刻し、それを大切にしながら、バランス感のいい臨機応変な判断に結びつけたい。

風

風はどこからやってきて、どこへ帰っていくのだろうか？動きの中に見えないものを見る(感じる)訓練は、天と地の間にいる「人」という

存在に気づかせる。思いがけず、「気づき」の「気」にも忍び込んでいるのだが、「気」は、雲の流れる様を形どり、畏敬の「×」印さえ復刻されている。

「風」の由来は、鵬(鯢)の飛翔の様、後に、同音「凡(ハン)」に台風=竜の記号の虫を入れたそうである。大自然においては、風の吹き荒れる時は過ぎ越し、晴れの時は豊穡の山・海に狩・漁にでたのが、「人」が自然に支えられている原初イメージであろう。

風の支配する地方には、風神、風土、風物、風采、風貌がある。「土」や「地」は、育て育む母胎である。

ここで、思考実験をかねて、カタチ関連の文字で自由な発想を広げてみよう。動き、動かし、育ち、育て、崩し、重ねて、アフォーダンスという臨機応変な「できる力」を高めることができる。

云：伝、雲、魂、伝、陰、転、芸、会

様：文(紋)様、様子、様相

類：生類、人類、類縁、類型

然：偶・自・天・当・必・全・突

動：インタラクティブ、変動、移動

物：牛の毛皮、牛と鋤、モノ>十牛

壁：輪郭、境、隙、殻、皮

交：交通、交流、交配

転：転回、流転、気転

場：場面、場合

気(機)：会・転・分

空：虚・色・間

「情けは人のためならず」因縁果報という言葉がある。また、「愛は戻ってくるブーメラン」「愛は湧き続ける水のように、注がれていっぱいになった時、回りに注ぎ継げばいい」という喩えもある。風は、その時、その場所のみの現象

ではなく、大いなる存在の動きの一部なのだ！
「風の又三郎」ではないが、また、循環して戻ってきた時には、プラスアルファの効果を持っている。どのような壁でも通り抜ける風は、エーテルと憧れをもってよばれたこともある。

幾山河越えさりゆかば

寂しさの果てなむ国ぞけふも旅ゆく

(若山牧水歌集より)

遺伝と進化の長い営みにおいても、遺伝子プログラムのみでなく、それを満たしている間：細胞質や入り込んだ環境の影響も無視できない。次の曼荼羅でも視覚化するように、人間は、大宇宙の光の流れにのった生物界の連鎖の中に存在する、いわば水車や風車、不思議な糸で絡み合った歯車なのだ。食物の流れだけでなく、情報（知）の流れにおいても、イノチは山あいの池のような開放された準定常状態のイメージである。そこでは、因果を超えた動的な変化が、日夜繰り返されている。ラブアクチャリという映画のモチーフでもあるが、冷静と情熱の間には、広大な日常がある。自然・イノチの車モデルに、ロトカボルテラ方程式、陰陽道の五行思想などがある。

「情」は、深い水の青さや、宇宙からみた愛おしい水の星・地球ガイアの慈悲深い青さに通じているが、本当の智も同様に深く、ループの中に発想・行動のヒントを獲得できる。

大いなるものにいだかれあることを

今朝ふく風の涼しさに知る

(山田無文禅師のコトバより)

曼荼羅

生かされているネットワーク連鎖の図に、曼

荼羅がある。曼荼羅とは、輪円具足すなわちネットワーク繋がりで、すべてが組織的に折り畳まれた悟りのカタチを表しているが、餓鬼すらも位置している。「まだら」「フラクタル」もこの仲間で、グローバル（大域）とローカル（局在）が共存した「グローカル」、あるいは、全体（ホール）と個（オン）が融合した「ホロン」というよび方もある。

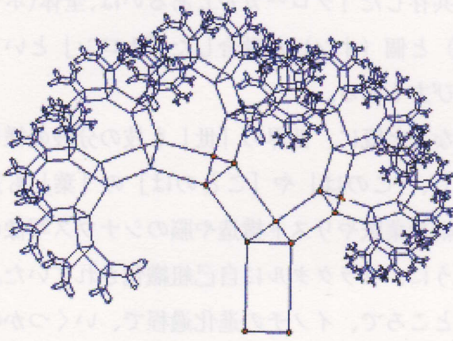
なんと既に、世界の「世」も枝の分岐の様を表し、「このは」や「ことのは」の「葉」も道路網や葉脈やリスト構造や脳のシナプス写像のように、フラクタルに自己組織化されていた。

ところで、イノチの進化過程で、いくつかの選択肢があった。ラングルトンは、新しい生命観を樹立するため、人工生命という人工的なイノチのカタチ⁷⁾を研究分野にした。南方熊楠は、粘菌という動植物の原初融合形を研究した⁸⁾。次第に、連携した機能(コト)のスイッチは、通常目にする形態を分化させた。さらに、遺伝情報の交換システム（有性生殖）は、寿命（死）と個体の独自性を、進化の加速化と引き換えにした。言葉が生気を失う危険性と同じく、個別性もそのルーツ故郷を忘れては、時に「魔」となる。

曼荼羅表現にも、2つの試みがある。1つは、金剛(ダイヤモンド)界曼荼羅とよばれる整合・結晶的な包括性・秩序のイメージである。もう1つのアプローチは、胎蔵(子宮)界曼荼羅で、大日如来、あるいは南方熊楠のいう萃点(すいてん)から、放射状に生成的な調和を表す図である。空海がこれを不二(1つ)として編み込み、統一した。

立体は、同時にすべての面を見ることはできない。しかし、連想の眼で多重化されたイメージを観ることはできる。編み物や布が、紐や糸の絡み合いの連なりであるように、同じような

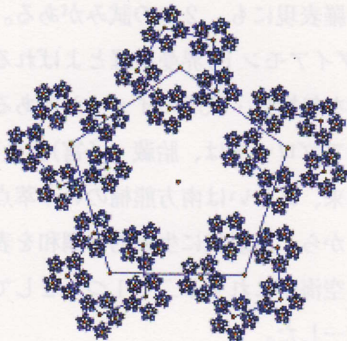
ことを繰り返しながらもカタチを変えるエッシャー画のような動的变化(メタモルフォーゼ)を意識しよう。そうすると、日々の営みは、酵素・メッセンジャ・キャリアなど緻密な継承機構に思えてくる。



フラクタル (木)

同様な紐の端(裂け目)には、金剛・胎藏の他に、ア・ウン(阿・吽、阿・伝)、カオス・エロス、fact・fantasy などがあり、その間には、絡みあった様々な人間模様が描かれる。

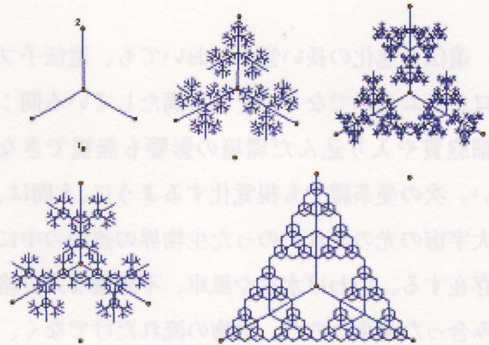
現実には絡み合っている網のインタフェースを見られるところがある。上空から見た河川、根、葉、葉脈、鼻、肺、消化管、腎臓、脳神経、毛細血管、柔毛などの日夜を問わない交換活動は驚異に値する。



5回対称曼荼羅

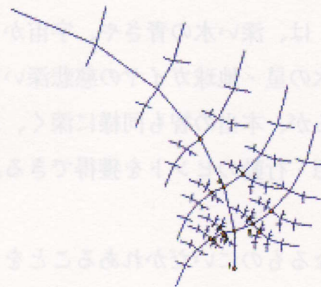
インターネットにおいても、自己組織的なブログ(web log)という仕組みが注目されてい

る⁹⁾。ある1つのホームページを個とみると、そこに他の個からのエントリというリンクやコメントの芽を取り込み、トラックバックという他の個へのリンクの種さえも植え付けて、新しいコミュニティの森・曼荼羅を形成しつつある。このように、曼荼羅的なネットワーク繰り込みは至るところにあり、瞬間的な因果律は破綻限界になっても、長期的・包括的・生成的な捉え方で道が拓けてくる。



形態形成の多様性

また、空海が鑄造に必要な水銀を求めて旅をしていたと伝えられるように、「わかる」「つくる」「つかう」の総合的な生きる力を、ぜひとも教育の大きなインセンティブ(充足動機)にしなければならない。



パラメータはわずかである。

火

ハウルの動く城という映画作品に、カルシファーという火の使いが出てくる。城というシステムの動力になっているが、破壊イメージの悪魔と魂が二重写しになっている。「魅」と「醜」の一見大きなニュアンスの違いも微妙なズレに始まり、「魂」や「塊」、「隗」に収束できる。同様な火の扱いは、プロメテウスの火の因縁に始まり、ナウシカの劫火（原子力）、建設と人工的災いなど、人類歴史に多大の影響を及ぼしている。

五行思想によれば、穏やかな火は相生、木から土へのリサイクル消化・再生過程であり、オールキャストも暖かに大団円を繰り広げる。一方、急激な火・炎は相克、強固なシステム・金をも溶解する。たしかに、攪乱と再組織化は、組織の古い壁や枯葉を取り除くには役立ちそうだが、ゆっくり芽生え始めているアモルファス液晶のような生長点の自律的な組織化にはジャマになる。また、教育においても、社会に参画する態度の養成は基本で、長期的な文化継承や遠隔生涯学習を見据える必要がある。

情熱の使い方の火も同様な配慮を必要とし、語る、守る行為にも、その人の履歴が反映する。「驚き・発見・わくわくどきどき」を再構築し、「わかる」に繋げる厳しい生き方を幼い頃からの習慣にしたいものである。先入観を排除した虚心坦懐なトランス状態は、火の鳥のように未来に飛翔させ、虹の架け橋をカタチにする。行動原理は、場当たりの修正主義ではなく、喜びの共有（シェア）による社会化意識である。イリイチのいう共愉（コンヴィヴィアリティ）も同様に、聖の領域に敬意を表したカタチである。

一人きり泣けても

一人きり笑うことはできない。

（中島みゆき：withより）

沈む夕日を一緒にながめてくれる

友がいれば、他に何もほしいものはない。

（さだまさし：人生の贈り物より）

泡

流れに浮かぶうたかたは

かつ消え、かつ結びて…

（鴨長明：方丈記より）

夢の生まれる所に旅立った。

（映画 A.I. のエンディングの言葉より）

すがりたい誰かを失うたびに

誰かを守りたい自分になるの

……

たとえサヨナラでも愛してる意味

（中島みゆき：誕生より）

ギリシャ神話によれば、美や愛の由来であるヴィーナス（アフロディーテ）は、ガイヤと切り離されたウラノスの血のしたたりが、波打ち際に落ちてできた泡から生まれたと伝えられている。生命の起源、細胞と泡との関連も面白い。「露」「涙」「雫」にも同様のメタファがある。「気」を吹き込まれて、「命」となる。「命」も「令」も受け止める器の象形だそうである。そういえば、ハートマークの由来も聖杯であった。命に、人間の使命感を感じるのは、砂漠の民の契約に限らない。

生命の「生」は、草木の生い茂る形からできた。また、花は、草木の変化した交配イメージを持つ盛りの雰囲気漂わせるが、文明や文化も、聖なる「文」が人前に晒されたカタチからできている。恥じらいを持って、しかし祖先への憧れを持って、使用にあたっての供養は行わ

れるべきなのだ。一説によると、あのウラノスも地球のオゾンバリアになって、イノチを守ってくれているそうである¹⁰⁾。

「雪」も天からの贈り物であるが、「月」は、地球ガイアの鏡像である。「陰」「韻」「幽」「玄」の雰囲気は、優しい逞しさの根源である。伯楽が、千里馬の差異を見抜く眼を持っていたと伝えられるように、「云」の曖昧さや、「糸」の絡み合いの中に、全体像や将来像を観る余裕が大切である。

夢も哀しみも欲望も歌い流してくれ

(中島みゆき：歌姫より)

天上の宝石は星々であり、イノチの雫石は地球ではないのか？ 知のレベルを知恵から、さらにアフォーダンスに高め、自在にスケール変換や時間旅行に慣れると、フラクタルに繋がった大恩・大我と交信ができる。季節の花、雲の流れ、コーヒーカップのミルクの渦や光の戯れにも、気感覚が研ぎすまされる。

おわりに

カタチの生まれるところを探しての旅は、ひとまずこれで終わる。雑学に似ているが、振り返れば、日常の営みに生気を蘇らせているようである。ちょっとした工夫や発見を共有し、絵手紙風の模写やビデオの編集にも生き甲斐を感じる。

次のような内容をまとめとして、実践していきたい。

- ・遠近法や歳時記のように自分の前に広がる世界を、その場その時々美しいと感じたい。
- ・活躍できる場は少ないかもしれないが、世界の行く末について、関心を持ち続け、できる範囲だけでも発言を続けたい。
- ・包括的で生成的な、イノチというかたちを大切にしていきたい。
- ・人間というカタチは、頭で考える以上に素晴らしい機能を持っている。健全であるためには、環境の変化を虚心坦懐に受け止め、下手にたわめることなく、全身でこれに対応すれば、必ず道は拓ける。
- ・この道で共に愉しみながら、一緒に呼吸し、歩いている。
- ・カタチを知ると、自分はどうか存在し、どうなっていくのか想像できる。野蛮な殺し合いや独善的な強制の抑制になる。

参考文献

- 1) 長田 弘：黙されたことば，みすず書房（1997）
- 2) SE 編集部：組込みソフトウェアレポート2005，翔泳社（2004）
- 3) 糸井重里：智慧の実を食べよう—学問は驚きだ—，ぴあ（2004）
- 4) 白川 静：風の旅人，ユーラシア旅行社（2004）
- 5) 安保 徹：医療が病いをつくる—免疫からの警鐘—，岩波書店（2001）
- 6) 藤原 昇ほか：自然学—自然の「共生循環」を考える—，東海大学出版会（2004）
- 7) 下原勝憲：人工生命と進化するコンピュータ，工業調査会（1998）
- 8) 阿部博人：南方熊楠を知っていますか？，サンマーク出版（2000）
- 9) GEODESIC：プログの力，九天社（2004）
- 10) 梁瀬光世：ガイアのたくらみ，新水社（2004）